

ファミリーコンサート

0歳からの楽しい音楽会

感染症予防対策でステージと客席を仕切るなどの工夫をし、令和2年11月14日(土)に高松学習館で赤ちゃん連れでも楽しめる、歌とピアノのコンサートを実施しました。

アンケートでは「演出が面白く、かつ歌のクオリティーも十分だった」「子どもを産んでから、好きな音楽を聴いたりこのようなコンサートに参加することが難しかったので、久しぶりに聴けて本当によかったです」「久しぶりに若い時にもどりの心の中で口ずさみました」といった声が寄せられました。今後も感染症予防対策に留意して事業を実施していきます。



高松学習館 ☎(527)0014

今年度はオンライン開催 

立川の教育がここに！

第17回「立川教育フォーラム」を開催！

新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中、それでも、「人と人とのつながり」を大切に立川市の学校では教育活動に取り組んできました。立川市民科などの授業でタブレットPC等も取り入れた新たな教育活動を中心に、これまで培ってきた地域や国を超えた人々とのつながり、伝統や文化を継承する人々とのつながりを生かした、学校の取組について事業報告などを行います。さらに、特別講演では、美術教師/東京学芸大学個人研究員/アーティストの末永 幸歩先生に「ものの見方、考え方が広がるアート思考」についてご講演いただきます。

なお、今回は感染症対策のためオンライン開催とし、後日、映像を配信する予定です。詳しくは、教育委員会のホームページをご覧ください。 **固指導課・内線2499**

テーマ 思いをつなげ、未来を拓こう！

内容 【第一部】 ● 児童会サミット報告(デジタルツールの良さや課題)

● 生徒会サミット報告 (ICTでよりよい地域づくり)

【第二部】 ● 第八小学校からの実践発表「大好き立川！わたしたちのファーレ立川アート」

● 立川第八中学校からの実践発表「地域に根ざした、小中連携教育活動」

講演 演題：「ものの見方、考え方が広がるアート思考」

講師：美術教師/東京学芸大学個人研究員/アーティスト 末永 幸歩 先生

講師プロフィール 末永 幸歩 先生



東京都出身。武蔵野美術大学造形学部卒業、東京学芸大学大学院教育学研究科(美術教育)修了。東京学芸大学個人研究員として美術教育の研究に励む一方、中学・高校で教壇に立ってきた。「絵を描く」「ものをつくる」「美術史の知識を得る」といった知識・技術偏重型の美術教育に問題意識を持ち、アートを通して「ものの見方を広げる」ことに力点を置いたユニークな授業を展開。

現在は子どもから大人まで幅広い対象に向け、アートを用いたワークショップを行い、「美術って思考力を高める授業だったんだ」「答えは1つじゃないと感じて気が楽になった」と反響を得ている。著書にベストセラーとなった『自分だけの答え』が見つかる 13歳からのアート思考 (ダイヤモンド社)がある。

立川教育フォーラムとは？

教育の充実と推進を図るために、保護者、市民、教職員が一堂に会した場で、教育実践等を紹介するフォーラムです。平成16年度から今年度で17回目を迎えました。学校教育を通して、よりよい社会をつくるために、私たちがすべきことは何か、フォーラムを通じて、共に考えましょう。

近年、「縄文」がブームだといわれています。平成30(2018)年に上野の東京国立博物館で開催された「縄文—1万年前の美の鼓動」展は35万人以上の来館者を集めました。昨秋も関東地方では東京・千葉・茨城の都・県立博物館で「縄文」展が開催予定でした(東京はコロナ禍のため今秋に延期)。先史から現代までという長い期間を扱う歴史系博物館の特別・企画展において、3館でテーマが重なることは異例のことです。立川市内にも多くの縄文遺跡があります。向郷遺跡はJR南武線西国立駅の南側、錦町4丁目・羽衣町3丁目に位置し、およそ2万6000㎡もの面積を誇る大遺跡です。

向郷遺跡は旧石器・縄文時代の遺跡で、特に縄文時代中期の集落が著名です。中期の前半(およそ5400年前〜5000年前)に今の羽衣町3丁目交差点付近に集落(ムラ)がつけられました。中期後半(およそ5000年前〜4500年前)になると、現在の市営錦町住宅付近に集落が移動しています。市営錦町住宅地点の発掘調査では、集落の中心に広場があり、その周りを内側から順に墓域、ピット(小穴)群(掘立柱建物群か?)、竪穴住居群が同心円状にぐる



環状墓出土状況

垂飾り
滑石製(右)
コハク製(左)



「頭部保護」説と、疫病等の特殊な死に際しての「悪霊封じ込め」説に大きく分かれていきます。向郷遺跡では、290基以上確認された墓穴のなかでも、環状墓がみつかつたのはわずか10基ほどであったので、何か特別な理由がありそうです。

墓穴からは土器の他に、コハク製と滑石製の垂飾りが出土しています。垂飾りには穴が開いており、そこに紐などを通してペンダントのように使つたと考えられています。一種のアクセサリー(装飾品)ですが、おそらく呪術的な意味もあったでしょう。

290基以上の墓穴の中で、装飾品が出土したのは2基だけです。とりわけコハクは、東日本では千葉県銚子や岩手県久慈が主な産出地であり、縄文人にとっても希少品と考えられます。コハク製垂飾りを装着されて葬られた人物は、この集落のリーダー的存在だったかもしれません。

平成25年3月に、環状墓に使われた縄文土器や装飾品等計17点が、当時の社会や交流などを物語る貴重な資料であり、「向郷遺跡環状墓群の遺物」として、一括で市の指定有形文化財になりました。

歴史民俗資料館(生涯学習推進センター) 文化財係 ☎(525)0860

立川市の歴史と文化財

44

向郷遺跡環状墓群出土の遺物

りと取り囲んでいる様子が判明しました。このような集落の形態は、環状集落と呼ばれており、縄文時代前期から中期の大規模な集落で確認されています。

墓域には290基を超える墓穴がありました。その一部からは、逆さまになった状態で縄文土器が出土しています。これは「環状墓」と呼ばれ、亡骸の頭に土器を被せて埋葬したものと考えられています。なぜ頭に土器を被せたのかについては、頭は大事な場所だから保護したという「頭部保護」説と、疫病等の特殊な死に際しての「悪霊封じ込め」説に大きく分かれていきます。向郷遺跡では、290基以上確認された墓穴のなかでも、環状墓がみつかつたのはわずか10基ほどであったので、何か特別な理由がありそうです。